

潮流

最近の青少年・社会全体を取り巻くさまざまな心の問題の根底には現代の希薄な人間関係が大きく関与していると考えられます。人と人とのかわり(コミュニケーション)が少なくなつた今、幼いころからのコミュニケーション不足が、人間関係づくりを困難にしているのではないのでしょうか？

こうした中で、昨年まで赤崎高校(現鳥取中央育英高校)で行われていた『人間関係体験学習(コミュニケーション授業)』の取り組みは、昨今の諸問題解決への有効策として、関心を集めました。

『コミュニケーション授業』では、気づきの体験学習や乳幼児や高齢者の異年齢パートナーとの交流から、相手に思いを寄せる心やより良い人間関係のはぐくみ方を体験し、相手から喜ばれることで自分が役に立てたという「役立ち感」を実感します。

そうした実体験をもとに体系的に繰り返して学習することで、生徒は自分という存在に自信を持ち、自尊心・自己肯定感が芽生え、自分自身が本来持っている能力(自分の持ち味)を見いだします。

「触れ合うって楽しい!」「自分も役に立っているんだ!」「生きていてよかった!」と感じ、日常生活も意欲的になり、心を開き、心結び、瞳輝かすようになりました。

そして、この取り組みは、鳥取大学医学部の『ヒューマン・コミュニケーション授業』に受け継がれ、教育関係者はもちろん子育てに不安を持つ親や子どもたちと日々接している小児科医からも注目され、全国各地へ広まり、さまざまな方面で取り組まれ始めています。この人間関係づくりを学ぶ取り組みを広めるため、平成十五年春に「人間性回復プロジェクト」が発足し、平成十七年度からは『鳥取発心のふれあいプロジェクト』と改名して、子どもたちの未来を考え、思いやりのある日本をつくり上げるよう、小さな鳥取県

鳥取発心のふれあいプロジェクト

NPO法人未来副理事長、鳥取県中部医師会副会長 松田 隆

から、大きな取り組みの全国発信を始めました。

昨年の全国集會では、「共感の根(Roots of Empathy)」「主宰のメアリー・ゴードン氏が、カナダ・トロントの共感教育を紹介されました。幼稚園から中学校で、生徒たちは一年間、ひとりの赤ちゃんの九回の教室訪問とその前後のインスタクターによる学習を通して、赤ちゃんの変化に気づき、その成長発達に触れ、共感性を養っていきます。言葉のしゃべれない赤ちゃんが何で泣いているのか、何で笑っているのかを考えることで、相手へ関心を持ち、思いやりの心が生まれま

す。人は赤ちゃんに触れ合うことで、心が和み、優しい気持ちになります。逆に、泣かれてばかりいると養育者の怒りを引き出し、虐待にまで至らせることもあります。言葉を使えない赤ちゃんは、全身で人のさまざまな感情を引き出します。



2011.11.8

この赤ちゃんの力を借りて、将来、親になる子どもたちの心、人への共感性を育てるプログラムが「共感の根」です。自分の育ちや親子のつながりなどをふりかえり、育児体験を積むだけでなく、どのような大人になりたいかなどの自己イメージを育て、命への慈しみなどが育ちます。この共感教育もカナダ国内に限らず、世界各国で取り入れられています。今や世界各国で、人間関係の問題が浮き彫りにされ、「心の時代」になってきたのではないかと想います。

共感性は子育てや人生における対人関係能力の基本であり、今こそ、『コミュニケーション授業』の必要性が求められています。

この一端に触れる全国集會が十二月二日、三日の両日に鳥取県湯梨浜町の羽合小学校、ハワイアロハホールで開催されます。一緒に、共感性を感じてみませんか。問い合わせは電話08558(222)9791、NPO法人未来事務局へ。

(倉吉市)